

2021年6月27日
宮崎中部教会
牧師 乾元美

詩編 62 : 8~9

ルカによる福音書 14 : 25~35

「イエスさまの弟子とは」

<弟子の条件？>

今日の聖書箇所の小見出しには、「弟子の条件」と書かれています。しかも、書かれている内容は、とっても厳しいことばかりです。家族や自分の命でさえも憎まないなら、とか。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、とか。自分の持ち物を一切捨てないならば、とか。何だかストイックなことばかりです。

これがもし、この条件をクリアしないとイエスさまの弟子にはなれません、と言うことであるなら、これからイエスさまを信じようとしている方は、ちょっとやめておこうかな、となりそうです。また、すでにイエスさまを信じている方も、あれ、わたしは条件を満たしていないから、弟子を失格になるのかな、と考えてしまうかも知れません。

でも、今日ここに書かれているのは、イエスさまの弟子になるための条件ではありません。今日のところで、三回繰り返されている言葉がありました。それは、「わたしの弟子ではありえない」という言葉です。26、27節、そして33節にあります。

「わたしの弟子ではありえない」。つまり、イエスさまは、「こうこうでなければ、わたしの弟子にはなれない」と言っておられるのではなくて、「こうこうでなければ、わたしの弟子であり続けることは出来ない」と言っておられるのです。

これは、すでにイエスさまの救いの招きに応じて、従っている者たち、付いてきている者たちに語られていることです。

これまでイエスさまは、神さまが人々を救いへと招いておられること。ご自分がその招きを伝えるために、またその救いを実現するために遣わされ、来られたということ。だから、この神さまの救いの招きに応えなさい、恵みを素直に受け取りなさい、ということ語って来られました。

そして、イエスさまはこの時、すべての人の罪を贖い、復活して、救いの御業を実現するために、ご自分が十字架に架けられて死ぬために、エルサレムへ進んでおられるところなのです。それが、今日の場面です。

そこに、大勢の群衆が一緒について来た。救いへの招きを聞いて、御言葉を聞いて、イエスさまのもとに来たのです。

しかし、来たらそれで終わりではない、とイエスさまは言われるのです。イエスさまの救いの招きに応え、恵みを受け入れ、イエスさまに従っていく者となった。そうしたら、これ

から先も、終わりの日まで、イエスさまの弟子としての歩みは続いていくのです。イエスさまの弟子であり続け、信仰の歩みを、最後まで歩み通すのです。

ですから今日の所では、イエスさまが、そのようにイエスさまの弟子としての歩みを最後まで全うするためには何が必要か、ということをお教えられるのです。

<二つの例>

イエスさまが語られた、塔と戦の二つの話も、そのことを示すために語られています。

一つは28節の、塔を建てようとするお話しです。塔を建てようとする時には、まず腰を据えて、それを造り上げる費用があるかどうか計算しなければならない。つまり、塔を完成させるためには、最初にちゃんと必要な備えを確かめなければならない、ということです。そうでないと、塔を建て始めても、途中で必要なものが無くなってしまい、最後まで完成させることが出来ません。

二つ目の、31節以降の、王さまが戦に出る話も同じです。腰を据えて、敵の兵を迎え撃つのに十分な兵を自分が持っているか、確かめなければならない。もし持っていないなら、和解を求める方法を選ぶだろう、と言っています。

つまり、どちらも、必要なものをしっかりと確かめ、ちゃんと心備えをしなければ、最後まで完成させることが出来ない、達成することが出来ない、という話なのです。

イエスさまの弟子としての歩みを全うするためにも、わたしたちは、そのためにこれが必要である、ということをはっきりと見つめて、そのことに心を傾けて、腰を据えて、歩いていかなければならないのです。では、イエスさまは、何が必要だと仰っているのでしょうか。

<弟子であり続けるためには>

[①家族や自分の命であろうとも、これを憎むこと]

イエスさまは、「こうでなければ、わたしの弟子ではありえない」ということを三つ語られました。まず一つ目は、26節のところでは、

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」

語られているのは、家族を憎むということ。更に、自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない、とされています。

これは、愛している家族をあえて嫌いになるとか、冷たくするとか、関係を絶つという意味ではありません。それなら、最初から家族との関係が悪い人は、自分は簡単に達成できそうだな、と思うかも知れません。それに、自分の命を憎むというのも、自分の命をどうでもよいように扱う、という意味ではありません。

この「憎む」という言葉は、他のものをより一層愛する、という時に使われる言葉だそうです。つまりAをBよりももっと愛する、Aを一番に愛する、という時に、「Aを愛し、B

を憎む」というような言い方をするので。ですからここで、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を憎む。そして、自分の命であろうとも憎む、と言っているのは、それら以上に、もっと愛すべきものがある、ということです。

それはもちろん、イエスさまです。イエスさまの救いに与り、イエスさまに従って弟子として歩いていく者は、家族や自分の命以上に、イエスさまを一番に愛する者とならなければいけないのです。

イエスさまに従いますけれども、パートナーの方がもっと大事です。イエスさまを愛していますけれども、家族のことがあるので、従うのはちょっと後からにします。そういうことでは、イエスさまの弟子として最後まで歩み通すことは出来ないのです。また、そのような歩みでは、自分の命や、家族を、本当に愛することも出来ないのです。

イエスさまの弟子となった者がはじめに示されることは、イエスさまご自身がまず、ご自分の命以上に、わたしたちの命を愛して下さったということです。わたしの命を救うために、また、わたしたちの家族や、友や、すべての人の命を罪から救い出すために、イエスさまはご自分の命を捨てて、十字架に架かって死んで下さったのです。

わたしたちは、イエスさまの十字架の死によって、自分自身の命がそれほど神さまに愛されている、大切なものであると知ることが出来ます。だからこそ、本当に自分の命を愛することが出来るのです。

また、わたしたちの周りのすべての人々も、イエスさまが命を捨てて愛して下さった人々なのです。イエスさまは御自分の十字架によって、わたしの罪も、そして、家族や、友や、大切な人々の罪も、すべてを担って赦しを与え、命へと招いて下さいました。

わたしたちは、自分も、また周りの人々も、皆イエスさまに愛されて、イエスさまの命によって生かされているのです。皆共に、イエスさまの罪の赦しの中に置かれているのです。

そのことを知るからこそ、イエスさまが命をかけて愛し抜いて下さった自分の命を大切に出来る。そして、イエスさまが命をかけて愛し抜いて下さった自分の家族を、友を、与えられた隣人を、大切にし、また互いに赦し、互いに愛し合っていくことが出来るのです。

このイエスさまの愛を知ることなしに、受け取ることなしに、イエスさまを愛することなしに。わたしたちは、自分の命を本当に大切に愛することも、周りの人々、家族や、隣人を本当に大切に愛することも出来ないのです。

ですから、まずこのイエスさまの愛を知り、その愛を全身全霊で受け止めること。イエスさまの愛を受け入れ、信頼し、すべてを委ねて歩いていくこと。つまり、イエスさまを愛することこそ、まずイエスさまに従う者が、一番になすべきことなのです。

[③自分の持ち物を一切捨てる]

次に、先に 33 節にある、三つ目に語られたことを見たいと思います。そこには、「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

とありました。

これもまた、自分の一切の持ち物を明日にでも処分しろ、という意味ではありません。無一文にならなければ、弟子ではない、と言われているのではないのです。

持ち物とは、財産などの物質的なものだけでなく、自分に与えられているすべてのもの。富も、能力も、時間も、人間関係も、見えるものも見えないものも、すべてのものです。

そして、まずわたしたちは、本当に最初から自分で持っている物などない。自分の持ち物などない、ということ、知らなければならぬと思います。

わたしたちが持っているあらゆる物は、すべて神さまから与えられたもの。また神さまから託され、預けられた物なのです。神さまはそれを、わたしたちがイエスさまに従っていくために、また、わたしたちが生きるために、そして、隣人を生かすために、正しく用いることを望み、与えて下さっているのです。

しかし、いつしかその神さまの御心を忘れ、わたしたちが持ち物ばかりを見つめるようになる時、わたしたちはそれに執着し、神さまよりも、それらに依り頼むようになってしまうのです。わたしたちが試練や困難に遭う時に、まず神さまに依り頼むのではなく、イエスさまに救いを求めるのではなく、モノや、手段や、人に依り頼んでしまう。

そうなるならば、イエスさまの弟子ではありえないのです。

「自分の持ち物を一切捨てる」とは、自分の持ち物に一切依り頼まないこと。つまり、神さまにのみ、依り頼むということです。すべてを神さまに求め、すべてを神さまから受け取り、すべてを神さまのために用いること。そのような歩みの中でこそ、与えられたものを本当に正しく用いることができ、生かすことができるのです。また、持ち物によって、不安になることなく、また執着することなく、神さまに養われ、守られ、支えられていることに信頼して歩いていくことが出来るのです。それこそ、イエスさまに従う歩みなのです。

〔②自分の十字架を背負う〕

そして、もう一つイエスさまが仰ったのが、27節のところ。「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」

「自分の十字架」というのは、誰しもが人生で経験する、個人的なそれぞれの苦しみや困難などのことではありません。イエスさまが言われたのは、イエスさまに従うことによって負うことになる、苦しみや困難のことです。

聖書は、イエスさまに従う者は迫害に遭う、ということをはっきりと告げています。イエスさまを信じ、弟子となったら、苦勞がなくなるとか、波風立たない平和な生活が用意されている、とは言われていません。むしろ、信仰を持つがゆえに、この世的なものとの厳しい戦いがあり、神さまに逆らう者による迫害があり、悩み苦しみを経験することになるのです。

それでもわたしたちは、イエスさまにのみ救いがあること。イエスさまにのみ罪の赦しが

あること。イエスさまにのみ永遠の命があることを知っているからこそ、その苦しみや困難の中でも、喜んでイエスさまに従っていくことが出来るのです。イエスさまに従う者は、世のすべての罪や悪、そして死に、イエスさまがすでに勝利しておられることを知らされています。だからこそ、今、目の前にある迫害や、さまざまな戦いや苦しみも、希望を持って、耐え忍んでいくことが出来るのです。　そうして、イエスさまに従っていくことが、「自分の十字架を背負ってついて来る」ということなのです。

十字架は、処刑の道具です。当時の死刑囚は、自分が架けられ、殺されるための十字架の木を、自分で背負わされ、運ばされました。十字架を背負うとは、自分の罪のために、自分が滅ぼされるためのものを背負う、ということでした。

しかし、まずイエスさまが背負って下さった十字架は、ご自分の罪のためのものではなく、わたしたちの罪のためのものでした。イエスさまが背負われたのは、わたしたちの滅びでした。罪の重荷、神さまの怒り、永遠の滅び。わたしたちが背負いきれないすべてのものを、イエスさまが肩代わりし、すべて背負って下さったのです。

そしてイエスさまは、わたしたちのために命を捨て、十字架の上で死なれました。そうして、わたしたちの罪の贖いを成し遂げて下さったのです。

ですから、今わたしたちが、イエスさまに従う中で背負っていく自分の十字架は、もはや自分を磔にし、滅びへ向かうためのものではないのです。

では、わたしたちがイエスさまに従うゆえに背負う十字架は、どこへ向かうためのものなのでしょうか。それは、イエスさまが十字架によって罪の贖いを成し遂げて死なれた後、復活して下さったその栄光に、わたしたちも共に至らせていただくためのものなのです。

わたしたちのために十字架で死なれたイエスさまは、死者の中から復活なさいました。そうしてこの方が、罪にも、死にも勝利なさったことが、明らかにされました。わたしたちは、この方に従っているのです。

ですから、イエスさまに従うわたしたちが背負う、自分の十字架の重みは、滅びへ向かう絶望の重みではありません。自分の十字架を背負って向かう先は、痛みと苦しみと絶望に満ちた、滅びの死刑場ではありません。それはもうイエスさまが代わりに背負い、イエスさまが代わりにすべて受け止めて下さったからです。

わたしたちは、イエスさまの御跡に従って、イエスさまが成し遂げて下さった罪の贖いの死を通り抜けていきます。そして、その先の、イエスさまが父なる神さまによって、死者の中から復活させられた、その大なる栄光に、向かっていくのです。

この復活の希望に向かっているからこそ、わたしたちはイエスさまに従う中での悩み苦しみに耐えることが出来る。自分の十字架を背負う力、耐え忍ぶ力を与えられて、イエスさまに従っていくことが出来るのです。

<塩気をなくさないこと>

このように、イエスさまが「こうでなければ、わたしの弟子ではありえない」と仰ったこ

とを見てきました。

しかし、よく見つめれば、わたしたちが、家族や自分の命以上にイエスさまを愛する、ということも。自分の持ち物を捨てるということも。自分の十字架を背負って従うということも。すべては、イエスさまが、わたしたちをこれ以上ないほどに愛して下さり、神さまがわたしたちに全てを与えて下さり、わたしたちが背負うことが出来ないものは、すべてイエスさまが代わりに負って下さるからこそ、出来ることなのです。

わたしたちがイエスさまの弟子であり続け、信仰の道を歩む通すことが出来るのは、イエスさまの愛と救いに、神さまの恵みに、すべてかかっているのです。

最後、34節以下に、「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」とありました。

ここには、塩に塩気がなくなってしまうたら、もうその塩には味を付けようがない。その塩は役に立たなくなってしまう、と語られています。

わたしたちもまた、イエスさまの弟子とされたのに、イエスさまの愛を見失うならば、神さまの恵みを見つめなくなってしまうならば、どうしようもなくなってしまうのです。だから、塩味を失ってはいけません。神さまの愛に、イエスさまの救いの恵みに、留まり続けなければならないのです。

そうすることによって、わたしたちは恵みによって生かされ、イエスさまの救いを世の中に証しするものとされていく。この世において塩として、神さまのお役に立つ者として、用いられていくことが出来るのです。

ここでも、わたしたちは決して、塩になりなさい、などとは言われていません。自分で塩になったり、味付けをすることは出来ないのです。

ここではまず、塩は良いものだ。あなたたちは、ちゃんと味の着いた、良い塩気を持つ塩だ。あなたたちは、愛され、恵みに与り、良しとされたものだ、と言われているのです。

そして、その恵みを失わないようにしなさい。イエスさまを何よりも愛しなさい。神さまの恵みをしっかりと受け止め続けなさい。救いを見失わないで、与えられている希望を見つめて、信仰の道を歩み続けなさい。そう、言われているのです。

それこそが、わたしたちがイエスさまの弟子として歩んで行くため、弟子であり続けるために必要な、大切な、心備えなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを、イエスさまの救いへのお招きに、応える者として下さい。そして、イエスさまの愛に留まり、イエスさまの恵みに生かされ、イエスさまにのみ依り頼み、ただあなたの恵みによって、弟子であり続けることが出来ますように。ただあなたの力によって、わたしたちに、この信仰の歩みを、最後まで全うさせて下さいますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン